

第15回東アジア古代史・考古学研究会交流会 予稿集

日程：12月6日（土）・12月7日（日）

場所：両日とも東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室

○6日 各地区代表による研究発表

- 13:30～ 発表1 井上美奈子氏（専修大学）
「栄山江流域における有孔広口小壺の様相」
- 14:30～ 発表2 中村大介氏（大阪大学）
「支石墓の系統と展開」
- 15:30～ 発表3 寺井誠氏（大阪市文化財協会）
「格子タタキが施された在来土器」
- 16:30～ 発表4 木村幾多郎氏（大分市歴史資料館）
「『韓国新石器時代結合式釣針考』その後」
- 18:00～20:00 懇親会・各地区活動報告

○7日 シンポジウム「東アジア考古学からみた弥生時代の曆年代」

- 9:30～ 趣旨説明
- 9:40～ 発表1 宮本一夫氏（九州大学）
「東北アジアにおける青銅器の実年代と弥生時代の曆年代」
- 10:20～ 発表2 武末純一氏（福岡大学）
「北部九州弥生土器と南部朝鮮無文土器の併行関係および曆年代」
- 11:00～ 発表3 村上恭通氏（愛媛大学）
「中国・朝鮮半島の鉄器普及と曆年代」
- 12:00～13:00 昼食
- 13:00～15:30 討論 司会進行 後藤直氏（東京大学）・大貫静夫氏（東京大学）
コメント1 宮里修氏（早稲田大学）
「遼寧式銅劍文化期の中国東北地方と韓半島北部の併行関係について」
- コメント2 中村大介氏（大阪大学）
「石劍と遼寧式銅劍の関係にみる並行関係」
- コメント3 庄田慎矢氏（東京大学）
「湖西地方と北部九州をつなぐ」

第15回東アジア古代史・考古学研究会交流会予稿集目次

○「各地区代表による研究発表」予稿集

「栄山江流域における有孔広口小壺の様相」井上美奈子（専修大学大学院）	2
「支石墓の系統と展開」中村大介（大阪大学大学院）	10
「格子タタキが施された在来土器」寺井誠（大阪市文化財協会）	18

○シンポジウム「東アジア考古学からみた弥生時代の暦年代」予稿集

「2003年の弥生時代暦年代に関する研究会・論文一覧」	28
「東北アジアにおける青銅器の実年代と弥生時代の暦年代」宮本一夫（九州大学）	30
「北部九州弥生土器と南部朝鮮無文土器の併行関係および暦年代」武末純一（福岡大学）	35
「中国・朝鮮半島の鉄器普及と暦年代」村上恭通（愛媛大学）	40
「遼寧式銅劍文化期の中国東北地方と韓半島北部の併行関係について」宮里修（早稲田大学）	41
「石器においての並行関係」中村大介（大阪大学大学院）	44
「湖西地方と北部九州をつなぐ」庄田慎矢（東京大学大学院）	48
—紙上発表—	
「松菊里石棺墓出土の銅劍を考えるための10の覚え書き」大貫静夫（東京大学）	51

○各地区研究会活動報告

九州	53
大阪	53
京都	54
東京	55
名古屋	56

「『韓国新石器時代結合式釣針考』その後」木村幾多郎（大分市歴史資料館）	57
-------------------------------------	----

表紙カット

表：岡内三眞 1982 より

裏：寺井誠本誌掲載図より

格子タタキが施された在来土器

寺井 誠(大阪市文化財協会)

本発表は弥生時代後期から須恵器出現以前の日本在来の土器に、非在来的である格子タタキが施された例を検討し、それを通じて当時の異文化受容的一面を検討することを目的とする。搬入土器ではなく、こういった折衷土器を素材として選んだのは、非在来的な属性を在来土器が取り込んだということがわかりやすく、さらに、形態的な特徴によって単独でもある程度の時期を把握することができるからである。

本文で用いる「在来土器」について、日本の伝統的な土器様式を継承してきたものを包括的に指し、あくまで朝鮮半島の土器と相対的に扱うようにした。表題の「格子タタキが施された在来土器」とは、こういった在来土器に格子タタキが施されるものを指す。なお、筆者は原体での刻みの方向の違いで「正格子」と「斜格子」を使い分けたことがあったが(寺井誠2002)、今回扱った資料で原体上の刻みの方向を把握できたものはなかったので、ここでは格子の凹部が正方形・長方形の場合は「正格子」、菱形・平行四辺形の場合は「斜格子」と呼ぶことにした。

1. 資料の紹介(図1～3)

管見による限り、須恵器出現前で格子タタキが施された在来土器は15遺跡19例ある(表1)。ただし、弥生時代中期の3遺跡5例については、後述のように同時期の朝鮮半島に存在しないことや、当時流水文やシカの文様を象ったタタキメ(スタンプ?)の例(図3-4)が存在することから、基本的に庄内式期以降に見られる格子タタキとは系譜が異なると考える。

弥生時代中期の例を除けば、萱振遺跡のものがもっとも古くなり、弥生時代後期末に位置づけられる(大阪府教育委員会1994)。細片ばかりであるが、頸部の破片から判断して、畿内第V様式の甕の器形に格子タタキが施されたものであろう。弥生時代後期末から庄内式期に位置づけられる元岡遺跡の器台は、胴部外面全体と脚端部に斜格子タタキを施す(武末純一1991a)。通常この種の器台は端部をナデやハケで仕上げるが、タタキを施しているという点が興味深い。

庄内式古相には近畿地方で吉田南遺跡(註1)や長原遺跡(大阪市文化財協会1999)、伴堂東遺跡(奈良県立橿原考古学研究所2002)の甕のように、通常施される平行タタキの代わりに格子タタキが施されているものがある。長原は細片でわからないが、残りの2点はタタキの後にハケが施されている。矢部遺跡の土器片は胎土が在地のものと共通すると報告されている(奈良県立橿原考古学研究所1986)。器壁が8mmと厚いことから、壺のような大型の土器に格子タタキが施されたのであろう。

庄内式新相～布留式古相では、山中遺跡の壺や、西新町遺跡(福岡県教育委員会2003)、二口六丁遺跡(金沢市教育委員会1983)の甕などのように、通常は器面にタタキメを残さない器種に格子タタキメが残っているものもある。特に、山中遺跡のものは形態的には北部九州在来の壺であるが、胴部には格子タタキを施した後、胴部最大径部よりやや下がった位置に台形突帯を貼付け、さらにその突帯の上面にも格子タ

タキを施している。また、西新町遺跡のものについては球胴で、内面にヘラケズリが施されてはいるものの、ヘラケズリが頸部下まで施されない点や胴の張りが弱いという点で、通常の甕の特徴とはやや異なる。

布留式新相では御手水遺跡や豊中遺跡の例がある。御手水遺跡では甕や壺に加え小型丸底土器といった、通常タタキが施されない器種にも格子タタキメが残る。豊中遺跡の山陰系二重口縁甕の胴部に、凹部の一辺が4mmの斜格子タタキが施されている。

以上のような土器に施された格子タタキは、布留式甕など通常タタキメが残らない器種にも残っているという点で、単に平行タタキが格子タタキに置き代わっただけではない点も見受けられる。また、元岡遺

表1 格子タタキが施された在来土器一覧

時間	遺跡名	器種	胴部外面調整	格子凹部形態/大きさ(mm)	内面調整	文献・備考
弥生中期	日暮	壺	タタキ→ハケ・ケズリ	平行四辺形/10×5		センター1996、他1492
弥生中期	瓜生堂	壺	タタキ→ハケ・ナデ	平行四辺形/7×5		センター1996、低1100
弥生中期	瓜生堂	細片	タタキ?	長方形/8×3	ハケ	センター1996、低1310
弥生中期	瓜生堂	甕	タタキ→ケズリ	平行四辺形		瓜生堂調査会1973(未見)
弥生中期	千代川	壺	タタキ→ハケ・ケズリ	菱形/一辺5~6	ハケ	川代1985
弥生後期末	菅振	甕	タタキ(→ハケ)	正方形/一辺2~3	ケズリ・ナデ	大阪府教委1994、13点
後末~庄古	元岡	器台	タタキ→ハケ	菱形/一辺5×5	ハケ	武末1991a
庄内式古相	大垣内	甕	タタキ→?	正方形/	ハケ	兵庫県1991(未見)
庄内式古相	吉田南	甕	タタキ→ハケ	菱形/一辺6±	ハケ	註1
庄内式古相	長原	甕	タタキ	正方形/一辺2~3	ナデ	大阪市文協1999
庄内式古相	伴堂東	甕	タタキ→ハケ	正方形/一辺3~4	ハケ→ナデ	査考研2002
庄内式古相	矢部	壺	タタキ→ナデ	長方形/3×2	ナデ	査考研1986
庄新~布吉	山中	壺	タタキ	正方形/一辺2	ハケ	郷ノ浦町1999
布留式古相	西新町	甕	タタキ	菱形/一辺2	ハケ→ケズリ	福岡県2003
布留式古相	日六丁	甕	タタキ	平行四辺形/7×5	ハケ→ケズリ	金沢市1983
布留式新相	御手水	甕	タタキ→ハケ	正方形/一辺2	ケズリ	佐賀市1994
布留式新相	御手水	壺	タタキ→ハケ	正方形/一辺2	ハケ→ナデ	佐賀市1994
布留式新相	御手水	小丸	タタキ→ハケ	正方形/一辺2	ナデ	佐賀市1994
布留式新相	豊中	甕	タタキ	平行四辺形/一辺4	ナデ	豊中古池調査会1976(未見)

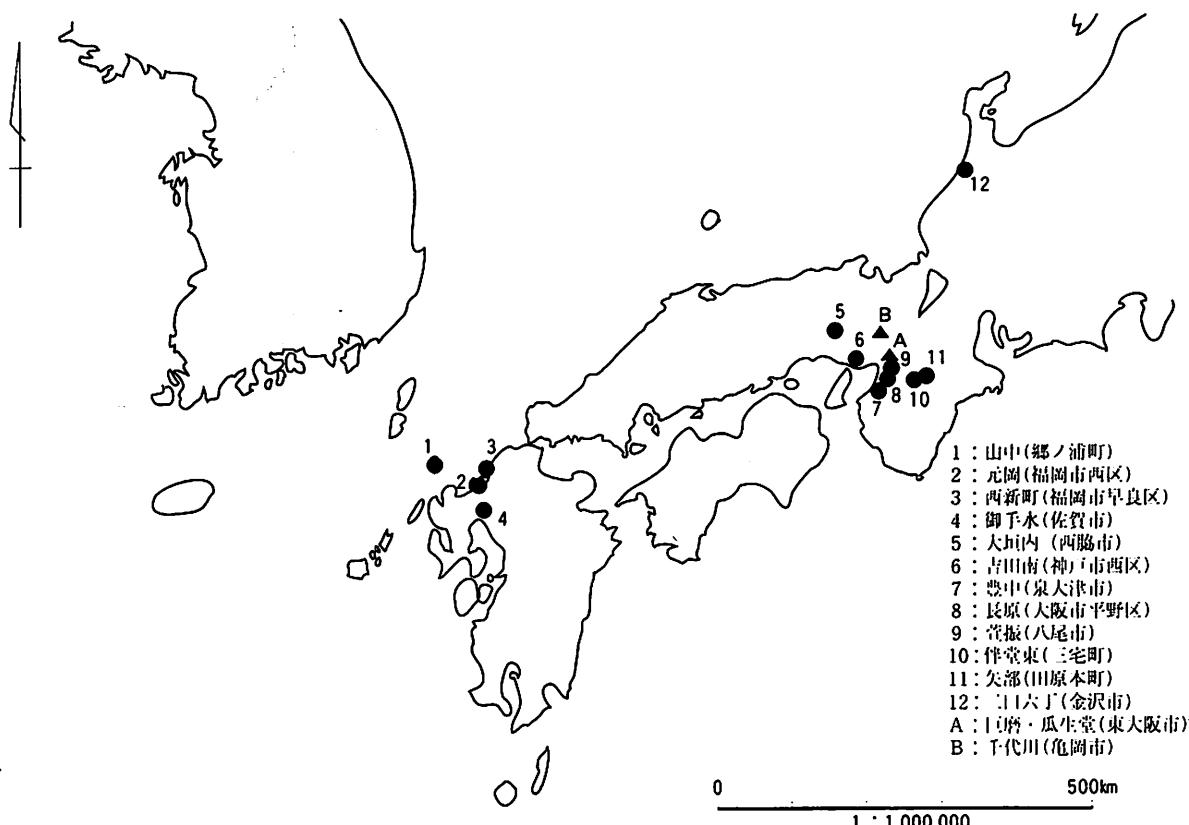
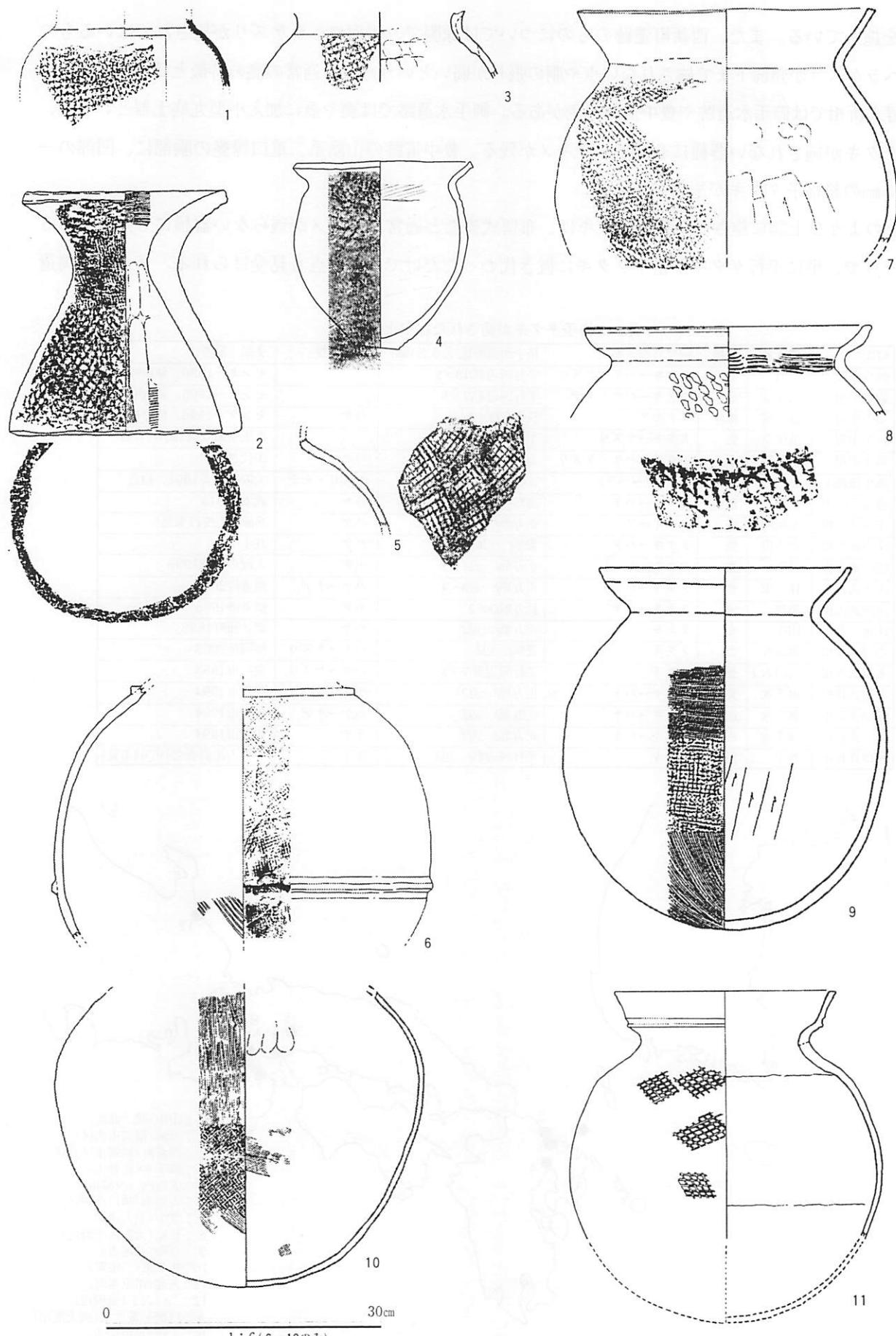


図1 格子タタキが施された在来土器の分布



1:萱振、2:元岡、3:長原、4:吉田南、5:伴堂東、6:山中
7:西新町、8:二口六丁、9・10:御手水、11:豊中

図2 各地の格子タタキが施された在来土器

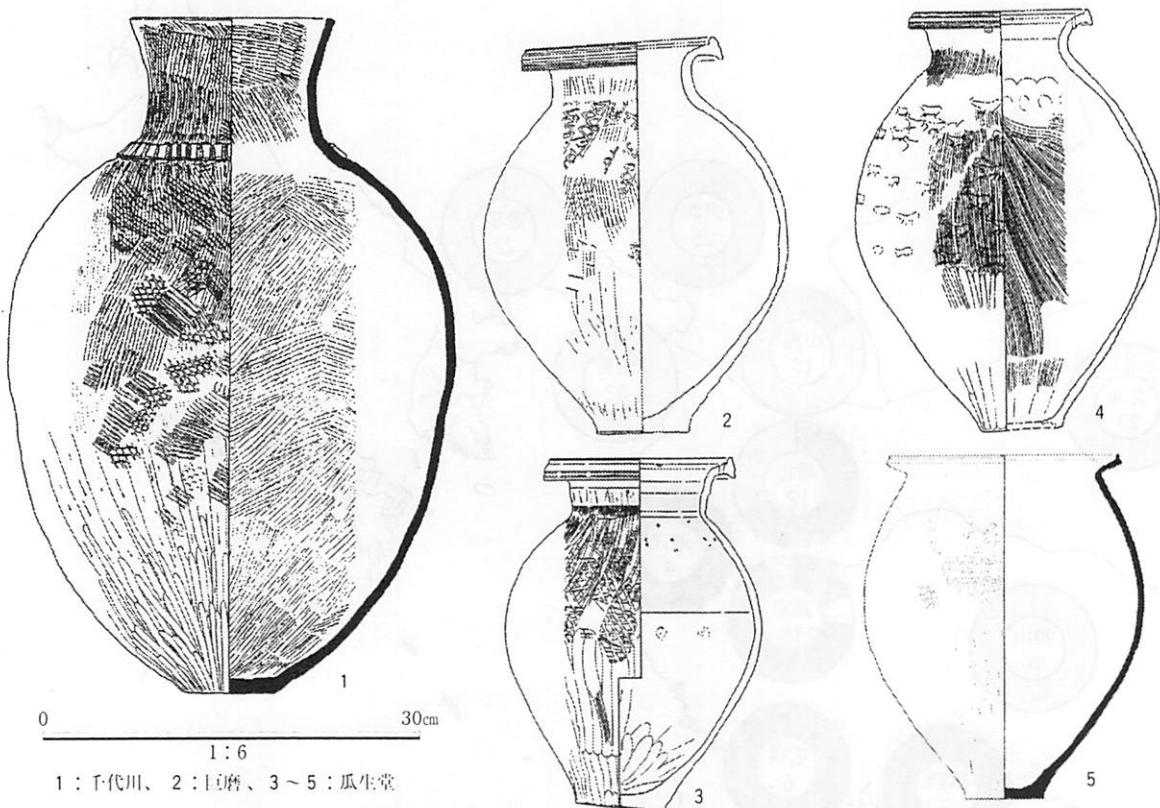


図3 弥生時代中期の土器に見られる「格子タタキ」とその関連資料

跡の脚端部や山中遺跡の突帶の上面のように、通常タタキが施されない部分にも格子タタキメが残っている場合もある。これらは成形の叩き締めの際に生じたのではなく、タタキ板を用いての整形によるものであろう。なお、元岡遺跡や吉田南遺跡、二口六丁遺跡のように格子の凹部が大きいもののが存在するという点も注意しておきたい。

時期的には庄内式期以前が7点、布留式期が7点であるが、新しくなるほど増加するというような傾向は見えないが、在来の平行タタキメさえほとんど残されない布留式期に格子タタキメが残されていたという点は強調すべきであろう。分布域においては北部九州が4遺跡、近畿地方が7遺跡、北陸が1遺跡である。須恵器出現前の朝鮮半島からの搬入土器は北部九州に圧倒的に多いにもかかわらず(寺井誠2001)、近畿地方が比較的多いのは興味深い。これは庄内式期以降に朝鮮半島の情報が近畿地方に集中し始めたことを示すものかもしれない(武末純一1991b)。

2. 中国・朝鮮半島における格子タタキ

ここで日本列島で格子タタキが登場する背景を考えるために、弥生時代に併行する時期の中国・朝鮮半島での格子タタキについて整理してみよう。

まず、中国大陆については『文物』や『考古』、その他の報告書に基づいて前漢、後漢(ここでは王莽代を含む)に分けて統計を取ってみた(図4:註2)。すると、漢代全体にわたって、長江以南に格子タタキが多く、それ以北は縄席文タタキが多いことがわかった。一方、朝鮮半島に近く、日本にも強く影響を与えたとされている山東省や遼寧省では確認することができなかった。

朝鮮半島北部では、山東省や遼寧省と同じく格子タタキはほとんど確認できなかった。A.D.2~3世紀に位置付けられる平壤市土城洞45号墳より平底の罐が出土しているが(社会科学院考古研究所1990)、形態

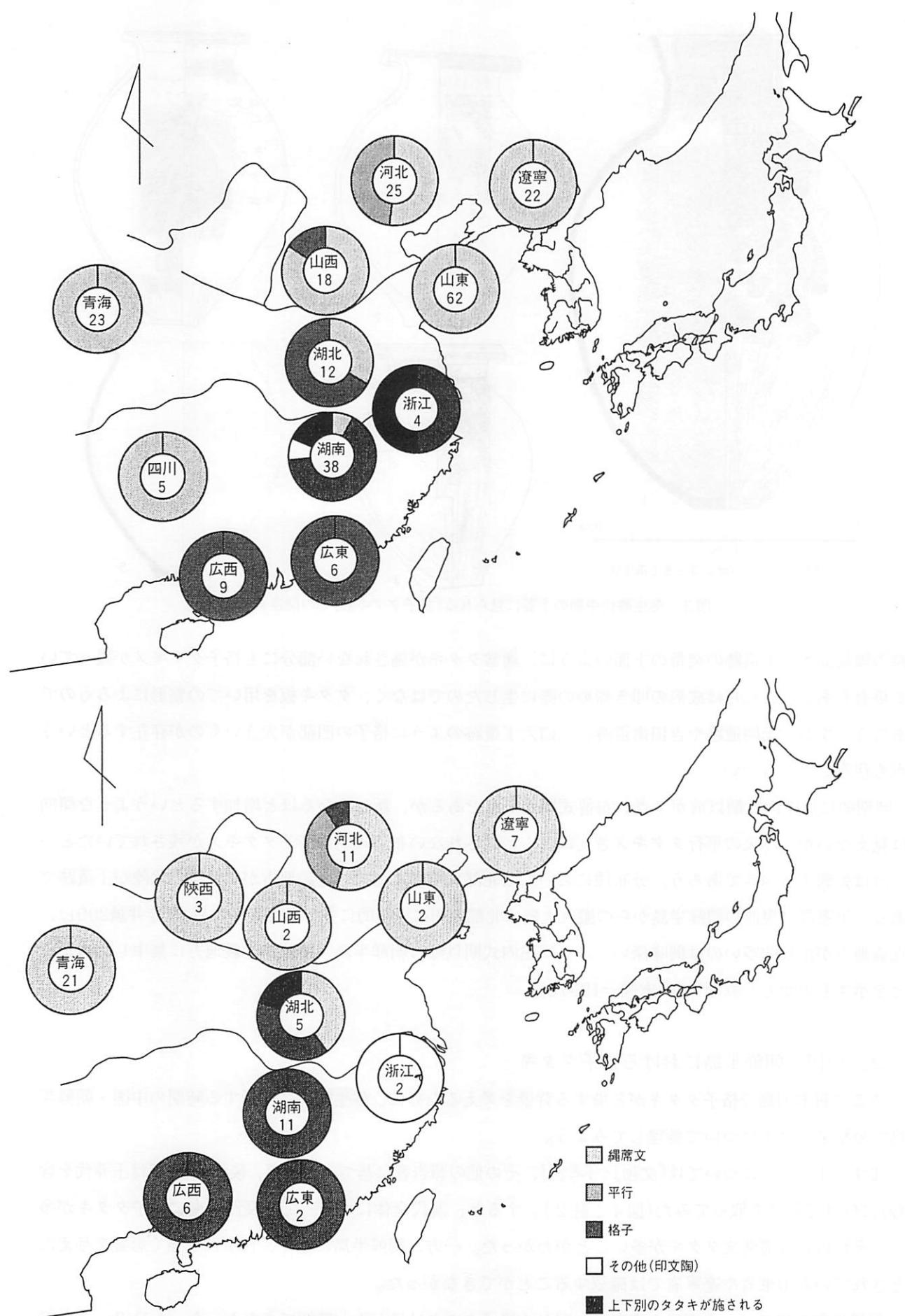


図4 漢代のタタキメのバリエーション(上段：前漢、下段：後漢)

的に長江下流域のものと形態が類似することから、樂浪在來のものというよりもそこからの搬入品であると考えられる。同じ頃に位置付けられる黃海道の養洞里3・5号墳から出土している丸底短頸壺の底部には繩蓆文タタキが残っていることから(国立中央博物館2001)、朝鮮半島北部では、樂浪郡や帶方郡が存続している期間は格子タタキは採用されなかったと考えられる。

朝鮮半島南部で格子タタキが確認されるのは2世紀以降である。李盛周(1999)は、2世紀初め頃に土器製作の技術革新が朝鮮半島中西部から南部地方に拡散し、その中に格子タタキも含まれると考えている。嶺南地域では牛角形把手付長頸壺のような三韓時代前期の還元焰焼成(瓦質土器)の器種にまず採用されてから、短頸壺にも格子タタキが施されるようになるが、酸化焰焼成の土器(赤色軟質土器)には3世紀になつても格子タタキは採用されない。

なお、西海岸地域で重視したいのは、胴部上半と下半でタタキの種類が異なる短頸壺が多く、その下半についてはほぼ100%が格子タタキであるということである。例えば、3世紀頃の枝川里遺跡(木浦大学校博物館ほか2000)や下鳳里遺跡(国立公州博物館1995)などの遺跡からは、胴部上半に縦方向の平行タタキが施された後、底部に格子タタキが施された短頸壺が出土している(図5-4・5)。このように上下で異なる

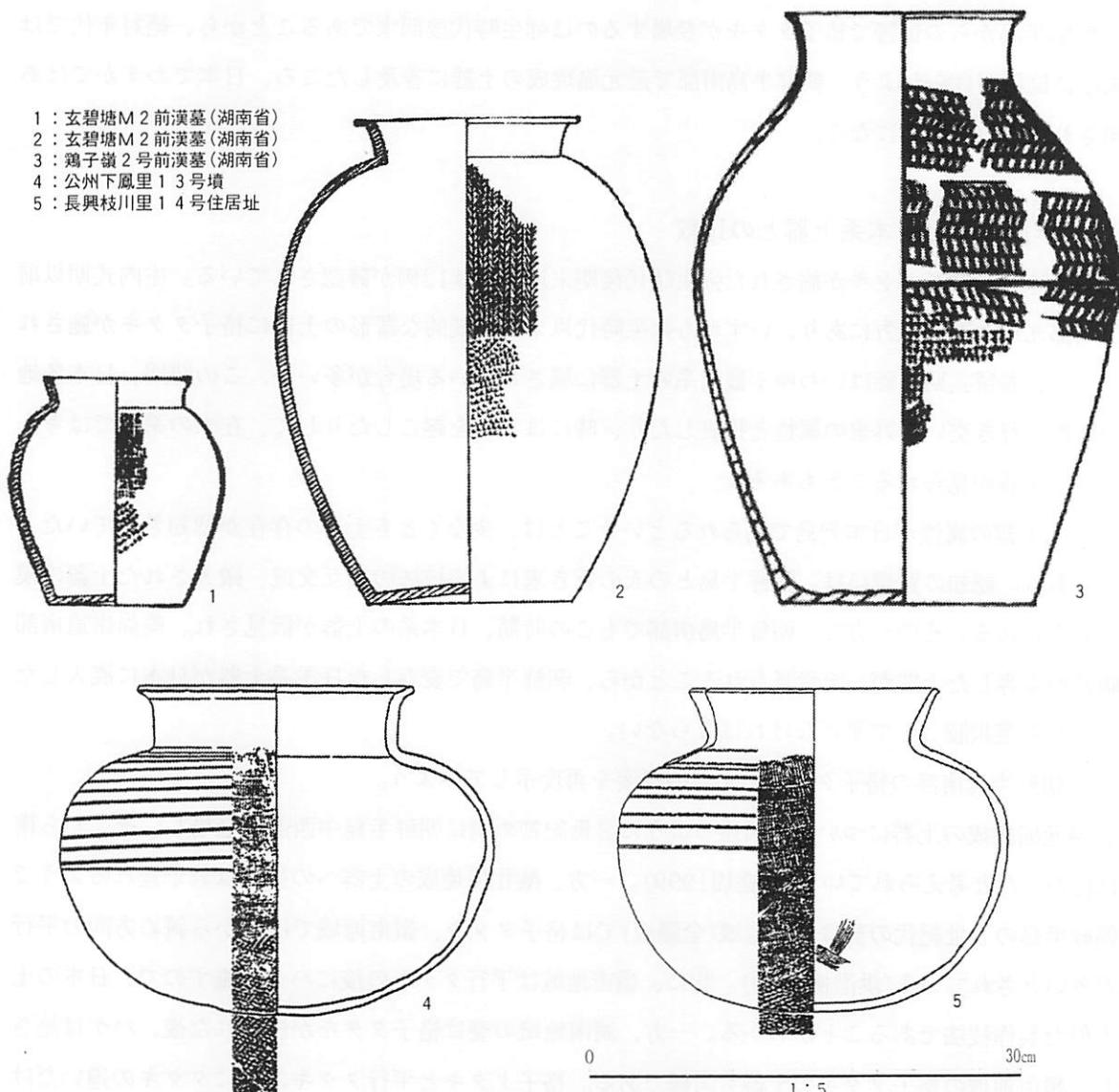


図5 中国と朝鮮半島の「タタキ分け」

るタタキが施されることを「タタキ分け」と仮称するなら、この「タタキ分け」は嶺南地方では見られない特徴である。

一方、中国での「タタキ分け」の事例は湖南省玄碧塘や鶏子嶺などの前漢墓で確認されている（衡陽市文物工作隊1995、湖南省文物考古研究所ほか2001）。ここでは上半に雲雷文タタキ（図5-1）や矢羽根状タタキ（同2・3）が、下半には格子タタキが施されている。報告文からは上下のタタキの前後関係はわからないものの、下半に格子タタキが施されていることを強調したい。これと格子タタキが長江以南に分布していることを重視するなら、格子タタキは山東・遼寧・樂浪地域を経ずに、長江流域から2世紀以降に朝鮮半島中西部に伝わり、それが南部地域一帯に拡がったということが想定され、こういった見通しは李盛周（1999）の指摘とも一致する。

以上の東アジアの流れを重視するならば、まず、弥生時代中期の近畿地方の格子タタキは中国・朝鮮半島との関連では考えにくい。また、ひとつの原体の中で平行条線と組み合ったり、格子文の広がりが直線で遮断されて無文になっていたりすることから、後代の格子タタキとは明らかに異なる。一方、この時期流水文やシカのスタンプ文など特異な文様が器面に着けられることがしばしばある。よって、これらの格子文も当時の叩き板のバリエーションのひとつで、日本で自生的に現れたものと思われる。

一方、朝鮮半島からの影響で格子タタキが登場するのは弥生時代後期末であることから、絶対年代では2世紀末頃に位置づけられよう。朝鮮半島南部で還元焰焼成の土器に普及したころ、日本でわずかではあるが採用されたということになる。

4. 朝鮮半島南部の日本系土器との比較

前述したように、格子タタキが施された弥生時代後期末以降では12例が確認されている。庄内式期以前のものは北部九州と近畿地方にあり、いずれも弥生時代以来の伝統的な器形の土器に格子タタキが施されている。一方、布留式期以降はいわゆる畿内系の土器に施されている場合が多いが、この時期、日本各地の土器の属性が行き交い、外来の属性と折衷したり、時には変容を起こしたりして、在来の系譜では考えられなかった土器が見られることもある。

朝鮮半島の土器の属性が日本列島で見られるということは、少なくとも土器の存在が認知されていたということである。認知の背景には、朝鮮半島との人の行き来による技法の相互交流、搬入された土器の模倣などが考えられる。その一方で、朝鮮半島南部でもこの時期、日本系の土器が散見され、慶尚南道南部では土師器が変容した土器が一定量見られることから、朝鮮半島で変容した日本系土器が日本に流入したということも選択肢として挙げなければならない。

ここで、朝鮮半島南部の格子タタキの土器の概要を再度示してみよう。

まず、還元焰焼成の土器については前述のように2世紀初め頃に朝鮮半島中西部に登場し、そこから南部一帯に拡がったと考えられている（李盛周1999）。一方、酸化焰焼成の土器への採用は若干遅れるようである。朝鮮半島の3世紀代の甕は湖南地域（全羅道）では格子タタキ、嶺南地域では横から斜め方向の平行タタキが多いとされている（洪済植2000）。特に、嶺南地域は平行タタキの後にハケを施すので、日本の土器とよく似た製作技法であることがわかる。一方、湖南地域の甕は格子タタキが施された後、ハケは施されないし、嶺南地域の格子タタキの土器も同様である。格子タタキと平行タタキは単にタタキの違いだけではなく、非常に排他的なあり方をしていることが窺える。

4世紀代になると嶺南地域では一部ではあるが、格子タタキの後にハケが施された布留式系の甕や長胴甕が登場する(図6)。しかし、これらの土器の内面にはヘラケズリが施されていない。一方、日本の布留式甕は通常、内面にヘラケズリが施されている。本稿で取り上げた格子タタキが施された日本の布留式甕は他のものと同様にヘラケズリが施される。よって、同じ格子タタキが施された布留式甕でも、日本と朝鮮半島では全体的な製作工程が異なるのである。

こういった点も踏まえて見ると、日本出土の格子タタキ土器はハケ調整と共存しているということで、朝鮮半島で折衷化したものが搬入されたのではなく、日本で成立したことがわかる。

5. 課題と展望

以上、日本の格子タタキが施された在来土器を、中国・朝鮮半島の資料との比較を通じて検討してきた。日本の土器製作技法の中に取り込まれながらも、それはごく一部であり定着することはなかった点は武末純一(1991a)でも示されている。この理由としては、タタキ技法(成形技法)としてみた場合、日本には平行タタキが定着しており、整形技法としてはタタキの後にハケを施すという順序が定着していたために、新たに格子タタキを受容する必要がなかったということが考えられ、いずれにせよ積極的に導入しようとした状況は見てこない。ただ、格子タタキの扱い方が朝鮮半島と共通することから、単に格子タタキを

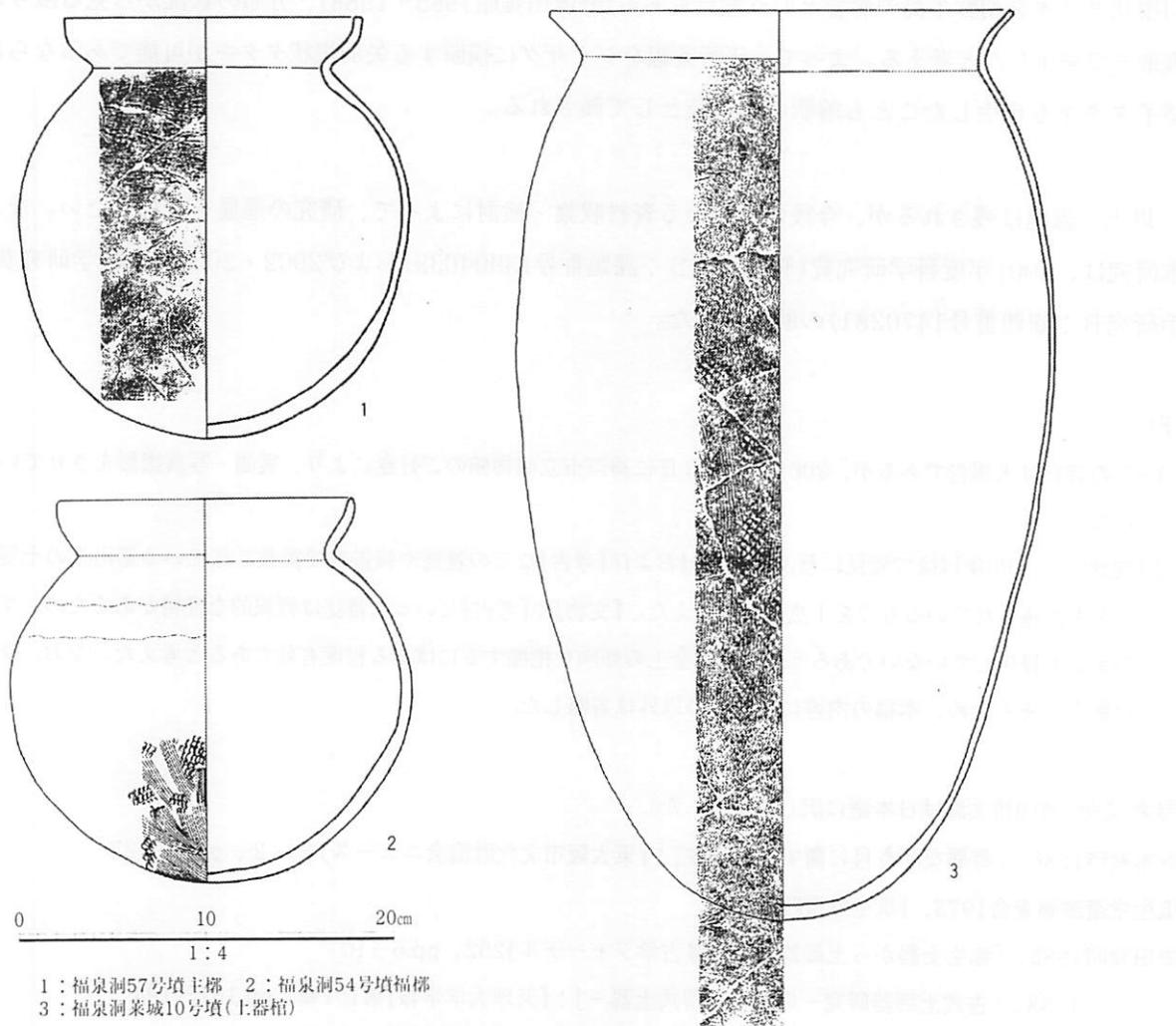


図6 朝鮮半島南部で格子タタキとハケが共存する土器

真似ただけでなく、土器作りに若干の影響を与える程度の人が庄内式期の段階で北部九州や近畿地方に到来していたことが想定される。

なお、課題もいくつか残される。

第一に、格子タタキが朝鮮半島のどの地域の影響によるものだったのかということも課題となろう。現状では製作技法の共通点があり、日本系の土器も多く、それが変容したものも存在する慶尚南道の南海岸部を考えているが、これらの地域ではあまり見られないような格子タタキメの凹みが大きめのものが比較的多いことも検討課題となる。朝鮮半島の南海岸沿いでは一辺が2~3mmが普通であり、一辺が5mmを超えるような斜格子タタキは京畿道地域の甕の底部に多く見られる。現時点ではこの地域からの影響という材料は見当たらないため、日本の在来文化が格子タタキを受容した際に変化した形態ということも念頭に置いておきたい。

第二に、これまで主張してきたことと矛盾するが、格子タタキが日本で自生した可能性は本当ないかという問題である。格子タタキが近畿地方に比較的多くあるということを指摘したが、この時期もうひとつの特異なタタキ=矢羽根状タタキが存在することを忘れてはならない。矢羽根状タタキは弥生時代後期後半から庄内式期の近畿地方で広く散見される(青木勘時1986など)。しかし、九州地方では雀居遺跡に1例(福岡市教育委員会2000)、朝鮮半島では金海鳳凰台遺跡に1例(釜山大学校博物館1998)しかなく、中国では長江流域にあるが、朝鮮半島を経由せずに、日本と土器製作技法で交流があったとは考えにくい。矢羽根状タタキを朝鮮半島の影響という意見もあるが(置田雅昭1985・1988)、分布の状況から見る限りは近畿地方で発生したと考える。よって、平行条線をジグザグに横断する矢羽根状タタキが可能であるならば、格子タタキも自生したことも解釈の選択肢として残される。

以上、課題は残されるが、今後のさらなる資料収集・検討によって、研究の進展を目指したい。なお、本研究は、2001年度科学的研究費(奨励研究B:課題番号13904039)および2002・2003年度科学的研究費(若手研究B:課題番号1470281)の助成を得た。

註)

(1)この資料は未報告であるが、2001年6月3日に神戸市立博物館のご好意により、実測・写真撮影をさせていただいた。

(2)統計では1980年以後で管見に及んだ『文物』および『考古』などの雑誌や報告書で掲載されている墓出土の土器で、タタキが施されているものを1点として数えた。『文物』や『考古』といった雑誌は概報的な性格があるため、すべての土器を報告していないであろうが、中国全土の傾向を把握するにはある程度有効であると考えた。なお、文献数は膨大であるため、本稿の内容に係るもの以外は省略した。

参考文献(韓国語文献は日本語に訳して掲載した)

青木勘時1986、「特異な叩き目に関する覚え書き」:『東大阪市文化財協会ニュース』2-2、pp.16-23

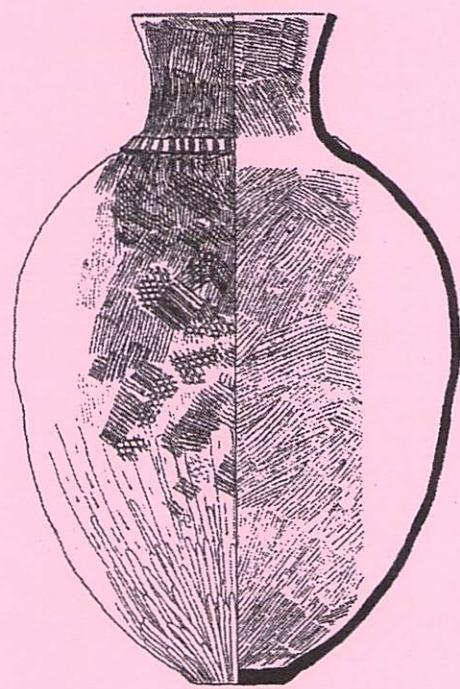
瓜生堂遺跡調査会1973、「瓜生堂遺跡」^{II}

置田雅昭1985、「弥生土器から土師器へ」:『考古学ジャーナル』252、pp.6-10

1988、「古式土師器研究—最初の布留式土器—」:『天理大学学報』第157輯、pp.161-194

大阪市文化財協会1999、「DD85-1次調査」:『長原遺跡発掘調査報告』VII、pp.79-96

- 大阪府教育委員会1992、「萱振遺跡」 大阪府文化財調査報告書第39輯
- 大阪府文化財調査研究センター1996、「河内平野遺跡群の動態」Ⅲ
- 金沢市教育委員会1983、「二口六丁遺跡」 金沢市文化財紀要32
- 郷ノ浦町教育委員会1999、「山中遺跡」 郷ノ浦町文化財調査報告書第1集
- 佐賀市教育委員会1994、「御手水遺跡」 佐賀市文化財調査報告書第55集
- 社会科学院考古研究所1990、「土城洞45号墳」「朝鮮遺跡遺物図鑑」2
- 武末純一1991a、「福岡市元岡遺跡の器台」「交流の考古学」三島格会長古稀記念肥後考古学第8号 pp.257-262
- 1991b、「西日本の瓦質土器—九州を中心に」：小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学』弥生時代編 六興出版、pp.204-210
- 田代弘1985、「亀岡市千代川遺跡の壺形土器—弥生時代中期に用いられたタタキ原体の一例ー」：『京都府埋蔵文化財情報』第18集 pp.35-37
- 寺井誠2001、「古墳出現前後の韓半島系土器」：『3・4世紀日韓土器の諸問題』、pp.194-221
- 2002、「朝鮮半島南部における2種の格子タタキ」：『大阪歴史博物館研究紀要』第1号、pp.31-39
- 豊中・古池遺跡調査会1976、「豊中・古池遺跡」
- 奈良県立橿原考古学研究所1986、「矢部遺跡」 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書第49集
- 2002、「伴堂東遺跡」 奈良県橿原考古学研究所調査報告第80冊
- 兵庫県教育委員会1991、「大垣内遺跡」 兵庫県文化財調査報告書第98冊
- 福岡県教育委員会2003、「西新町遺跡」V 福岡県文化財調査報告書第178集
- 福岡市教育委員会2000、「雀居遺跡」5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第635集
- 国立公州博物館1995、「公州下鳳里」
- 国立中央博物館2001、「鳳山養洞里埠室墓」 日帝強占期資料調査報告2
- 木浦大学校博物館・鉄道庁2000、「長興枝川里遺跡」 木浦大学校博物館学術叢書第63集
- 釜山直轄市立博物館1990、「東萊福泉萊城遺跡」 釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第5冊
- 釜山広域市立博物館福泉分館2001、「東萊福泉古墳群-52・54号-」 釜山広域市立博物館福泉分館研究叢書第11冊
- 釜山大学校博物館1996、「東萊福泉洞古墳群」Ⅲ 釜山大学校博物館研究叢書第19輯
- 1998、「金海鳳凰台遺跡」 釜山大学校博物館研究叢書第23輯
- 李盛周1999、「辰・弁韓地域墳墓出土1~4世紀土器の編年」
- 洪淳植2000、「軟質甕と甌による地域圈設定—3世紀代漢江以南地域を対象にー」：『韓国古代史と考古学』 鶴山金廷鶴博士頌寿紀念論叢刊行委員会、pp.277-307(寺井誠訳2003、『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.115-142)
- 湖南省文物考古研究所・永州市芝山区文物管理所2001、「湖南永州市鷄子嶺二号西漢墓」：『考古』2001-4、pp.45(総337)-62(総354)
- 衡陽市文物工作隊1995、「湖南衡陽市玄壁塘西漢墓清理簡報」：『考古』1995-3、pp.214-219



第15回東アジア古代史・考古学研究会交流会
兼シンポジウム「東アジア考古学からみた弥生時代の暦年代」
予稿集
2003年12月4日発行
編集・発行 東北亞細亞考古学研究会
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部考古学研究室内
